

黙示録8章：七つのラツパ

黙示録のおさらい

1. 見た事(1章)
2. 今ある事(2-3章)
3. この後に起こる事(4章以降)
→ 4章から後は、教会が天に引き上げられた(携挙)後のこと。

ここで大事なことは、「私たちが神の怒りから救われた」ということ。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。(ローマ手紙 5:8-9)」

→ 私たちが神の怒りを知ることによって、それがどんなに恐ろしいものか、そして、そこから救われることがいかに大切かを知る。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネの福音書 3:16)」

1-5節：七人の御使い

「第七の封印」： 私たちは第六の封印まで見た。

- 第一： 白い馬(反キリスト) 第二： 赤い馬(戦争) 第三： 黒い馬(経済的混乱)
第四： 青ざめた馬(死) 第五： 殉教者たち 第六： 天変地異

「七つのラツパ」： 第七の封印の中に、七つのラツパがあった。

→ つまり、これまでよりずっと強烈な災いが下るということ。

「ラツパ」： ヨエル書2章1節には大患難が始まるに当たって角笛が吹かれる。

「金の香炉」： 聖所の中に香壇がある。そこで香をたくために、聖所の外にある青銅の祭壇の火(炭)を香炉にいれて、香壇まで持っていく。

→ 神の裁きを下してくださいという祈りが今、神の前に届いた。

「雷鳴と声と稲妻と地震」： 主がシナイ山に降りて来られた時と同じ現象が。主の聖さと力を表す。

→ 次から起こる災いが、エジプトに下った災いに似ている。

6-12節：三分の一の災い

第一の御使いのラツパ： 地上の生きているものの破壊

「血の混じった雹と火」出エジプトにおける第八の災いも同じ

第二の御使いのラッパ： 海の生物、また海上の人々の滅び

第三の御使いのラッパ： 水源の汚染

「苦よもぎ」： 砂漠に生えている精神錯乱をもたらす草。悲しみと苦味をもたらす裁き(哀歌 3:15 等)。

第四の御使いのラッパ： 光源の減少

これも出エジプトの第九の災いに似ている。

なぜ三分の一か？ → 神の憐れみである。まだ悔い改める余地を残しておられる。

13節： なお三つの災い

「一羽の鷲」： 天的存在の一つ

「わざわざ来る」： 三回繰り返しているのは、残り三人の御使いがいるから。

第五、第六、第七の災いが来る。

第五と第六を、次の8章で読む。